

O S Sの生活史

第九篇

自分がずっとできなくて、でもやりたかったことだったので

語り手＝藤田優貴 (aruneko)

聞き手＝大川貴久

2026-09-02 50分16秒

九

自分がずっとできなくて、でもやりたかったことだったので

語り手＝藤田優貴 (aruneko)

聞き手＝大川貴久

2026-09-02 50分16秒

——まず皆さんに最初にお聞きしていることとして、初めてパソコンに触ったきっかけとか、その最初の頃の記憶といったところからお聞きしております。藤田さんが初めてパソコンに触った時とかきっかけとかって、何時か覚えてらっしゃいますか。

おそらく、まあ、ちょうど二〇〇〇年頃だったと思うんですけど。父親が持ってた富士通のノートパソコンにWindows 98が入っていて、それに触って遊んでいたというのが本当の始めですね。

——実際、パソコンで何をされてらっしゃったのですか。

中に入っているゲームとかやってまして。

——プリインストールされている、あの、ピンボールとか、ああいうやつですね。

そういうやつ。

——じゃあ、そこでもう、ご家庭にパソコンがあって、そのままずっとそのパソコンは、ゲーム以外にも使われて。

で、そのあとは、父親がまたXPのマシンを買ってきて。それをなんか、まあ一緒に触らせてもらったりとかっていう感じでしたかね。

——じゃあ、ご自身が主にパソコンとか、そういったものに触るようになったのは、もうそのまま、パソコンに触られてたからそのままきっかけで、っていう感じ。

そうですね。はい。

——初めてソフトウェアとか、そういったものに興味を持たれたっていうのは、具体的にパソコンを触り続けながらっていうところで、いつだったかとか。

まあ、いろいろあるんですけど。ちょっとSecHackの時にもお話ししたかもしれませんが、二〇〇三年ですね。二〇〇三年に、小学校のパソコンが新調をされたんですけど。それがWindows 2000とVine Linuxのデュアルブートで、パソコンの授業が行われていたっていうところがあった。まあ、そこが、何て言うんでしょうね、Windows以外との出会いでした。

——なかなか自治体でLinuxを採用されるってことがなかなか珍しいなと思ってお聞きしました。

そうなんですよね。あれは一体誰の、どういう判断だったのか、未だに分らないんですけれども。まあ、でも、おかげで今こういう仕事をしているところもありますね。

で、まあ、その後、当時Yahoo!ジオシティーズという、無料でホームページを作るサービスがありました。あれは多分、小

学校何年生だろう。四年生か五年生かな。五年生ぐらいの頃に。まあ、その友達のお父さんが、昔ソフトウェア的な仕事をしていたっていうのがあって、そのお父さんからホームページの作り方を習って、ジオシティーズで作ってみたんだ、みたいなのがあって。で、それに触発されて、自分もHTMLとかを書くようになったっていうのが、まあ割と、その、何て言うんですかね、Linux 方面にズブズブ行くきっかけの一つになった、っていう感じではあります。

——なるほど。実際、当時のホームページはレンタルサーバーみたいなところですかね。

はい。

——そこから、実際に自分でサーバーを立てたりとか、実際に建てようとはなかったっていうのは、どういう感じで。

ああ、どうだったかな。まず、その、静的な（スタティクな）ホームページがあって。で、なんか掲示板を設置しよう、みたいな。

で、FTP を使って、掲示板の Perl スクリプトをアップロードして。で、パーミッションで実行権限とかをつけないと動かないし。あと、なんかデータを保存している、データベースじゃなくて、当時はただのテキストファイルだったんですけれども、それ

に書き込み権限とかをつけておかないと正しく動かない、みたいなところがあった。で、まあ、なんか、そういうパーミッションっていう仕組みを、そこでまず学んだんですね。で、まあ、それが今度じゃあ、Apache っていうもので、ホスティングされてるんだ、とか。

で、そのうち WordPress とかも自分でインストールするようになるって、MySQL っていうものがあって、ここにデータが保存されてるんだ、みたいな感じで。まあ、そういうものがあるんだって知って。じゃあこれ、なんか自分で動かしてみたら面白いだろうな、っていうのがまああって。その、父からもらったお下りの XP マシンを土台にして。まあ、当時、Linux のインストーラーが CD に焼いてあるやつが、雑誌の付録として入ってる、みたいなのがありまして。その付録を使って、そのマシンに、Ubuntu の、8.04 です。二〇〇八年なので、8.04 をインストールして。で、まあ、自分でそういう環境を作って、あ、手元で WordPress が動いた、みたいなことを始めた、みたいな感じですね。

——じゃあもう、そこで実際に触られて、実際に立てられるっていうこともやられているんですね。

まあ、外部への公開とかはしてなかったんですけれども、さすがに。

——じゃあもう、そのまま趣味としてやられていく中で、中学、高校と進まれていく中で、ウェブ以外のところも興味を持って、っていうところ。

ウェブからだんだんインフラ方面に、みたいな感じですね。

——実際OSCとか、いろいろイベントとか、そういうところにも行かれてたというふうにあったと思うんですけど、そういうところに行くのも、そういうところがやっぱりきっかけとかだったんですか。

そうですね。で、WordPress 界限っていうんですか。高校一年生の始めというか、中三の終わり頃にTwitterアカウントを作って、まあ、そういうWordPress系の人をちらほらフォローするようになったんですけれども。まあ、そういう人達が、オープンソースカンファレンスに行ってきた、みたいなツイートをしていたのを見まして。で、あ、しかもそれが札幌でも開催されている、と。

で、最初に見たのはもう行ってきただっていうツイートで、あ、来年は行こうと。

で、やっぱりまあ北海道の片田舎なので、そういうLinuxの話ができる友達とかもいなくて。まあ、インターネットが全てだったの。まあ、そういうところに行って、なんかいっぱい話を聞いてみたいなあと思って、親にお願いしてJRの特急を取り、

一人で札幌に、みたいな。めちゃめちゃ楽しかったな、っていう思い出があります。

——そうなんです。実際、じゃあ、そういうところでイベントとか行かれるようになって、っていうところだったんですね。

これが高校二年生の時ですね。三年生の時から、もう今年まですつとスタッフで参加してます。

——毎年じゃあ札幌まで帰られて、ってことで。

はい、そうなります。

——すごい。やっぱり札幌とかでやっていると、SecHackの北海道に住んでる子とかも、やっぱり札幌には行ったみたいな話とかよく聞いたりするので。あと、大神さんとかも、札幌であるからそういうきっかけがあったっていう話とかも伺ったりして。やはりそういう、北海道にあるからこそ行けたっていうのは、大きかったりするんですかね。

そうですね。北海道でも、やっぱり札幌に行くっていうのは結構ハードルの高いことでした。JRの特急も、まあ当時は往復で四〇〇〇円ぐらいしたんですよ。高校生にとっては、やっぱり結構大きい値段じゃないですか。

で、まあ、北海道には、その一般社団法人 LOCAL っていう団体がいて。で、この団体が、そもそも OSC が始まるきっかけになった団体でもあるんですけども。いつだったっけな、OSC の前身になるような、GODO2004 っていうイベントが札幌で開かれて、それに宮原さんが来ていて。で、自分もこれ、イベントをやりたいって言って、二〇〇五年から OSC を始めて。で、GODO2004 の実行委員会が、その後、母体となって OSC 北海道を独自開催していく、みたいな。その流れで一般社団法人 LOCAL っていうのができるんですけど。

まあ、そこが、やっぱり、結局 OSC って、北海道とはいえ札幌でしかできないので。遠隔地にいる学生さんっていうのは、やっぱり結構、札幌まで来るという負担があるっていうことで、学生交通費支援制度っていうのをやって、まあ、今もやってるんですよ。

で、まあ、これを使うことによって、その金銭的負担がいくらか緩和されて。まあ、その北海道の、札幌より遠いところに住んでいる学生たちも、そういう活動に参加できるチャンスを作ってくれたっていう。これが大きいかなと思います。

——地域の団体、LOCAL さんとかのサポートがあつて、やっぱり活動がいろいろできてきますっていう。そうした中で、LOCAL さんとかにも結構関わってらっしゃって、っていうところがあつて。そうしたところで、ここから大学も北海道で過ごさ

れて、っていうところ。専門はソフトウェアとか、そういった形だったり。

一応、情報工学科というところに進学しまして。普通に情報の専門の授業を受けていた、っていうところではあります。

——実際にそういった中で、勉強されている部分と、趣味の、そのオープンソースと言わずとも、コミュニティとの関わりっていうところがあつたと思うんですけど。並行しながらやってるんですけど、同じように一つとしてやってるのか、それともまた別なのか、みたいなところとかで。

なるほど。えっとですね。まあ、やっぱり、その IT 勉強会って、そうは言っても、やっぱり大都会でしか開催されないわけですよ。で、僕はやっぱりそれが一番フラストレーションが溜まっていたところで。で、こんだけ情報の学生さんがいるんだから、まあ地元、室蘭でも勉強会できるんじゃないかと思って。

で、ちょうどその大学一年生の時に OSC に行った時に、ちょうど入れ違いで、卒業した先輩と会ったんですけど。まあ、自分が現役の時は、セミナーと MIT で、通称 SAMIT (サミット) っていう勉強会をやってたけど、引き継ぐ人がいなくて解散しちゃったんだ、っていう話を聞いて。じゃあ引き継ぎます、と

学内勉強会をSAMITと題してやるようになったっていうのがありますね。意外とコンスタントに人が来てくれましたし、皆さん、変なことをいっぱい喋ってくれたので、楽しかったなあという思い出があります。

——ご自身の観点から、そのイベントの参加とかの方も、大学以外のコミュニティとかっていうのも、いろいろやられてらっしゃったりっていうところがあつたと思うんですけど。それってどういうきっかけとかだったのですか。

大学のコミュニティは、まあ、そうですね。やっぱり、発表してなんぼと言いますか。まあ、LOCAL 学生部の別のOBの人とかも、すごい活動的に勉強会をされて、今でもされてる人が豊富にいるんですけど。そういう人の影響も受けて、とりあえず登壇しなさい、と。

「何でもいいからネタを持ち寄って、最悪、主催者しかいなくてもいいから、一人勉強会でもいいから。」、みたいな。いう感じで、なんか我々の世代の中では、そういう勉強会をもうやるっていうのが、もう当たり前の空気だった、っていうところがありましたね。

——そうした中で、それこそSecHackに出られてる、セキュリティ・キャンプとかあったりとかっていうのも。そういったところに出了られたのも、何か理由があつてとか、何か興味。

そうですね。えっと、(セキュリティ・)キャンプに行ったのは、その北海道ミニキャンプっていうのの初回の開催が二〇一四年だったんですけど。まあ、それをやるよ、って教えてくれたのが、まあ、LOCALの人で。LOCALでも手伝いをしているし、交通費支援も同じように出すから来てみないか、って言われて、行ってみたっていうところですね。

そこでセキュリティ・キャンプという存在を知って。で、LOCALには、この学生部っていう部活があつて。で、そこで一年上の先輩も、二〇一四年のキャンプの本選の方に行ってたんですね。で、まあ、なんかヒーヒー言いながら事前課題とかをやっているのを横目に見てたんですけども。でもすごい楽しそうだなと思う、二〇一五年に応募して、通ったっていうところがあります。

で、SecHackの方は、初回が二〇一七年なんですけれども。これも、SAMITとかLOCAL 学生部とかで一緒に活動していた後輩が二〇一七年度生をやっています。これもやっぱり同じラボで背中合わせにいたんですけれども。まあ、すごい楽しそうに活動しているのを見て。で、その時、僕はもうM1で、次M2だったんで、もう本当にギリギリだったんですけれども。ちょっと一応出してみようかと思つて。うっかり通つてしまい、一年間、柏崎先生にみっちり、という感じです。

——そうすると、その後、大学を出られた後もお仕事としてソフトウェアの方も進めてらっしゃって、かつ、趣味の方でもいろいろやられてらっしゃるっていう二つをやられてたと思うんですけど。お仕事だと、そういうソフトウェア、オープンソースでとかっていうのも関わってらっしゃったりとかっていうのは、ありましたか

えっとですね。その一社目が、まあ、すごいですね、強いオープンソース志向の会社でございまして。もうなくなっちゃったんですけど、Georepublicっていう会社で、Code for Japanの代表のさんが社長をされていた会社なんですけれども。

そこで、何て言うんでしょうね。会社の成果物を、まあ OSS としても公開しながら、でも、お金をもらって仕事をするみたいなようなことをしました。

——なかなか日本で、そういう会社ってあんまり聞いたことがないっていうふうに。

数少ないですよ。

——実際、具体的なところとか、言える範囲とかでいいんですけど、どういったものだったか。

Redmine って保存知ですかね。Redmine のプラグインで、GeoTaskTracker GTT っていうんですけれども、いうプラグイ

ンがありました。まあ、これを使った製品を作っていた、っていうところですね。

Redmine は、ただのタスク管理ツールではあるんですけど、そこに位置情報を加えることができるっていうものでした。

——そうしたお仕事でやられているものとは別に、いろいろ続けてらっしゃったと思うんですけど、そっちでのオープンソースとの関わり方とかっていうのは、何かあったりとかしますか。

ああ。まあ、そういう意味で言うと、まず SecHack の成果物が、今 GitHub に上がってます、っていうのが一つですね。それは WebUSB-MyNumberCard っていうもので。

——具体的にどういうものなのでしょうか。

今もうチャットに貼っちゃいますけれど。

(<https://github.com/arnuneko/WebUSB-MyNumberCard>) まあ、Google Chrome には WebUSB っていう謎の API が生えておりまして。JavaScript だけ USB のパケットを読み書きできるんですよ。それを使って、NFC のカードリーダーにパケットを送受信し、NFC のカードリーダーがマイナンバーカードにパケットを送受信し。で、マイナンバーカードの中身を覗いたりとか、API を叩いたりできるというようなものを作って。これを OSS として公開してるんですけれども。

何年か前にプルリクをもらったこともありますし。これを使って同人誌を書いて技術書典に出ます、とかっていう人は、あの、こういうのは嬉しかったですね。

——実際にOSSをやられてて、それを使われてらっしゃるっていうのを。

そうですね。こんなニッチなものを、と思ったんですけど。まあ、やってもらえたのは結構嬉しかった。素直に嬉しかった。

——個人で開発されている以外とかでも、なんかいろいろやってらっしゃるかなど。

そうですね。えーと、どこだったかな。これだ。これもSecHackの修了生のものなんですけれども。

(<https://github.com/masahiro331/go-ext4-filesystem>) まあ、Goでファイルシステムを解析して、中のファイルを読むことができるっていうライブラリなんです。これ、ext4って書いてある通り、ext4しか対応してなかったんですけれども。まあ、古いもの、ここにちょっと対応させたくて。対応できるように、そのパーサーを、バイナリを読みながら書いて、ここにプルリクを出して取り込んでもらった、みたいなになります。

このライブラリが、Trivyって分かりますかね。脆弱性スキャナーなんですけど。これもね、OSSの脆弱性スキャナーなんです

けれども。これは福田さんっていう人が作っていて、後にイスラエルのAqua Securityに買収されたっていうものなんですけど。

まあ、この福田さんと、それから、そのGoのパーサーを書いている藤村さんと僕は、一緒に職場で働いていたことがあって。

キャンプのつながりで招集されて。一緒に職場で働いていたことがあるんで。その働いている時の、二〇一八年のゴールデンウィーク明けとかに、なんか福田さんが作ったとか言って持ってきたのがこれ。まあ、本当にOSSになっていった。

で、その中で、そのディスクを解析して依存関係を持ってる、脆弱なパッケージを見つけるっていう、まあ、ところがあるんですけど。そこにこのパーサーが使われていて。Trivyを使って、ちょっと古いディスクを解析したかったので、ここにコントリビュートして取り込んでもらって。さらに、この取り込んでもらったものをTrivyに取り込んでもらって、っていう。

——実際に本当に大きいOSSの一部分を作られてらっしゃったっていうところ。やっぱりそれも、お仕事ではないですけど、お知り合いの方から頼まれて、実際やったっていうところなんですか。

本当はお仕事なんですけど。

——あ、なるほど。

仕事ではあるんですけど、まあ、でもOSSだし。自分でコン
トリビューションすれば、まあ、自分以外の人もこの機能を使う
ことができるし。まあ、Tivyの機能としても大きく拡張される
ので。世の中のためになるだろうと思って。

——実際にそういうお仕事もいろいろやりながら、ご自身のつて
いうところもありながら、つていうところで、オープンソースに
かなり関わってらっしゃって。実際に、そういうコードとかの部
分以外で、コミュニティという部分とかでは、その最近、大学を
出られてからつていうところではどういったところをやられてら
っしゃったんですか。

コミュニティは、まあ、そのOSCへの参加は続けていました
し。一社目、神戸だったので、例えば北海道じゃないOSCに行
ってみようつていうのもあつて。関西とか四国での開催とかには
行ってみたりしました。

あとは、ちょっと一回しかできてないんですけども。昔、
Elmつていうフロントエンドライブラリが流行つていた時期があ
つて。そのElmの勉強会を主催してみたりとか。あとは、これ
は去年ですけど、都電LTつていう謎の企画をやりまして。都電
荒川線という路面電車を一両まるまる貸し切り、三駅分という時
間でLTをさせるつていう。

——なかなかユニークな。

イベントをやったりとかはしましたね。

——精力的にやられてらっしゃるつていうところが今聞いて思
つたんですけど。こういうところも、そのきっかけつていうか、
どういうモチベーションでやってらっしゃるのかつていうのは。

面白そうだから、つていうのが一番ですね。とか、まあ、なん
でしょうね。やっぱり一番いいなと思うのは、技術を通じてエン
ジニア同士が交流できる場があるつていいなとは、ずっと思つてい
て。まあ、それはやっぱり、幼少期、自分がずっとできなくて、
でもやりたかったことだったので。

——じゃあもう、そういった機会とか場を提供していく、ではな
いんですけど、そういったことを今やっていかれている。

やつていきたいなと思いつつ。ちょっと本業が忙しくて、なか
なかできないなつていうのもあります。

——そうしたところで、コミュニティとしての活動もあつて、イ
ンターネットでの活動もあると思つて。そういった活動とかつ
ていうのも、同じようなモチベーション、面白そうだからつてい
う感じでやってらっしゃるんですか。

記事を書くのは、やっぱり、まあ知見のシェアつていうのが大
きいかなあと思つていて。まあ、自分が詰まったところとかは、

まあ誰かも詰まるかもしれないし。そういうところが整理されてメモされていると結構助かる、という実体験もあるので。少しでも役に立てればな、っていう形で残したりとか。

——技術記事、結構私も見たりするもので、何かしら書いたものがあると思う助かってるっていうのはありますね。

AI時代、もうAIに聞けばいいや、ってなっちゃうかもしれないですね。

——それかというと。AIとかの方に代わられたりとか、いろいろ。最近ではないんですけど、ここいろいろやられてきて、その課題ではないですけど、続けていく上で、難しかったというか、続けるのに対して、何かしら障害みたいな、難しかったこととかっていうのはあったりしましたか。

ああ、まあ、そうですね。まあ、それこそもう、AIがどんどん賢くなってしまったので。なんか今はなんかなくなってますけど、もっと賢くなった時に、コードが書けるっていうことがどれほどの価値があるもののかな、っていうのは思うところがあると思うのと。OSSに関して言うと、やっぱり、そのライセンスの問題とかも結構あったりして。これで大丈夫なんだっけ、みたいに、ちらっと頭をよぎることはあります。

——実際、開発されてて、それにどうライセンスをつけたらいいのか、みたいなことですか。

あ、だから、もともと、例えばこれGPLとかっていうコードがあったときに、AIを使って書いたコードでコントリビューションしてよかったんだっけ、みたいな。

——なるほど。実際にAIを使用してて、OSSに関わっていく上でどう関わるか、みたいなところ。

そうですね。

——AIとかっていうところは、やっぱりそういう関わり方、OSSとの関わり方がちよつと難しいっていうところがある。

あと、まあ、そもそもAI、今世間を賑わせているAIは、プロプライエタリな製品なので。まあ、なんか、そういうLinuxっていうかGPL文化圏で育ってきた自分にとって、若干やっぱり、これでいいんだっけ、みたいなことを思うっていうのは、しばしばありますね。

——それ言うと、やっぱりオープンにあるものがあった方がいい、みたいな認識があるって。

そうです、そうです。

——AI 以外でも、結構幅広いところで今までやられてきて、そういう感じで、不安とか、そういう何かしら問題かかっていう感じの部分とかっていうのは、ずっと、現在まで至るまでで、何かありましたか。

問題

——問題というか、ご自身が続けていく上で何かしら。

ああ、どうだろう。なんか、でも、意外とないかもしれない、というか。なんか、コードなら書けばいいかな、っていうと、ちよつとあれなんですから。コントリビューションできることがあれば、していこうっていう精神でやってきたので。まあ、なんていうか、まあ、自分のできる範囲で、ちよつと、まあ、背伸びとかはせず、できる範囲で続けていこう、っていうところは、ちよつとモットーにしていたっていう感じですね。

——それで言うと、コミュニティとかの方でいろいろ活動されているところでも、できる限りのことで。

そうですね。まあ、無理はしない、ということでしょうか。

——それは大切だと思います。今後、コミュニティとの関わり方っていうのは、このままどういうふうに関わっていくのかっていうのは、何か決まっていたりとかしますか。

やっぱり、技術者同士が交流する場はあってほしいと思っ
ているので。それに関して、なんでしょうね。イベントに参加者として行くでもいいですし。なんか最初の一回は参加者で行つてみようかな、みたいなところで。よかつたら二回目以降とかは、もうスタッフになつてしまふ、みたいな。

勉強会とかイベントって、スタッフで参加した方が圧倒的に
得、お得天というところであれですけども、お得天だと思つていて。

そういうイベントに、まあ、自分から関わっていきたく思
てる人たちが、やっぱり周りに集まるので。そうした人の熱気に
触れて、それを持ち帰ることができるな、元気になつて帰つてこ
れるな、っていうのもあるし。

なんか、懇親会とかでも、やっぱり、「あ、スタッフの人だ」
つて言つて、みんな話しかけてくれたりとかもするので。それで
意外な出会いとか、面白い話が聞けたりするっていうのもあつ
て。なんか、ただ参加者で行くより、スタッフの方が、より、な
んか持ち帰れるものが多いんじゃないかな、というところは、何
か感覚的に持っている。今後ともそういうふうに、イベント
とかには関わっていければいいなと思つてます。

——ありがとうございます。お聞きしたいなつていうことは結構
お聞きすることができたと思います。何かしら、こういったもの
に寄せて何かお話ししておきたいこととか、何かありますでし
ょうか。

あー、なるほど。この前、SecHackでお話を聞いたときに、そのOSSへの関わり方が分からない人にどうすればいいか、みたいな話をされたと思うんですけども。僕は、そのコードを書いてコントリビューションするっていうものの他に、OpenStreetMapとかのコントリビューションっていうのをやってたりして。

で、地図のトレースっていうのは割と誰にでもできるし、それがオープンデータになって出てくるっていうところ。結構、学生時代からオープンデータ界限にも実は所属していました。コードを書くだけじゃなくて、オープンデータの元になるものを集めてくる、地図に書き起こすとか。まあ、行政に掛け合っってオープンデータを出してもらうとか。

そういう、コードを書かなくても、書けなくてもできるコントリビューションの仕方っていろいろあるなあと思っていて。で、なんでしょうね、神戸時代とかは、オープンデータハッカソンとかもやりましたし。

えーと、幕末京都マッピングパーティーっていうのがあって。まあ、その京都の幕末に実際に起こった現場とかに行って、そこから辺の地図とかに書き起こせるようなものを写真に撮って、公民館、図書館に行くんですよ。で、図書館の司書さんに、それに関する本とかを紹介してもらって、その本をもとに、今度

Wikipediaの記事を書くんですね。Wikipediaのデータっていうのも、やっぱり一つのオープンデータではあって。

で、そういうところからも、なんか、その貢献ができるっていうことを、その時に改めて理解をしたっていう経験があつて。なんか、コードが書けなくても、そのオープンデータとかオープンソースの界限っていうのは、いろんなコントリビューションの方法があるので、自分に合った方法をぜひ見つけてほしいなっていう。

——オープンデータの方もいろいろやられてらっしゃったと。それで言うとCode for Japanさんとかもそうですけど。

そうですね。Code for Muroanの一応、立ち上げメンバー。

——そうなんです。実際、それも、もともとお仕事の方からとかだったんですか。

学生だったの。市役所のIT推進課の人たちが。室蘭市ってすごい、オープンデータに熱心な街だったので、大学に講演とかも来てくれていて。そういうところで知り合って、一緒にやっていこうっていう感じで。

——それこそオープンデータって、こういった活動をされてらっしゃるんですか。

室蘭にいた頃は、バスの時刻表のフォーマットでGTF5っていうのがあるんですけど、あれの室蘭版を作ろうっていうことでやっていたとか。あと、Code for Sapporoの方と連携して、札幌で作っている、あの、ゴミなし、5374.jpっていうのがあるんですけど。その、どの街に何曜日に何のゴミを回収します、っていうデータを作って入れておくと表示してくれるというウェブアプリがあつて。その室蘭版を作ってメンテナンスしたりとか。

これは僕が神戸に引っ越した後の話ではあるんですけども。古い社宅を取り壊して住宅地になったんですよ。で、そこに新しい町内会ができますと。で、若い人たちが引っ越してくるから、回覧板、紙の回覧板じゃなくて、これをLINEでやったらいいんじゃない、という話になって。その実証実験とかっていうのも手伝ったりしました。

——いろんなオープンデータの活動としてもいろいろやられてらっしゃった。

ちょっと今は足が遠のいちゃってるんですけど。という過去がありました、という話です。

——5374.jp、かなりいろいろなところで、いろんな町の。

バージョンがありますよ。

——それこそ浜松もありますね。

あります。素晴らしい。皆さんはいいものを作られましたね、本当に。

——ありがとうございます。なんか、もっと奥深い話をお聞きのことができて、ありがとうございます。

ありがとうございます。

語注

Vine Linux 日本語環境を重視した国産のLinuxディストリビューション。一九九八年から二〇二一年まで開発された。

Yahoo!ジオシティーズ 無料でホームページを作れたサービス。日本版は一九九七年から二〇一九年まで。

パーミッション ファイルごとに、誰が読み書き実行できるかを決める権限の仕組み。

Apache ウェブサーバーのソフトウェア。一九九五年公開。

WordPress` MySQL 前者はブログや小規模サイトを作るためのソフトウェア、後者はその裏でデータを保存するデータベース。いずれもオープンソース。**Ubuntu 8.04** 二〇〇八年四月公開のUbuntu。当時は雑誌の付録CDで配られることが多かった。

OSC オープンソースカンファレンス。第六篇の語り手が二〇〇四年に始めた。**一般社団法人 LOCAL** 北海道の技術コミュニティを支える団体。学生の交通費を補助する制度が続けている。

セキュリティ・キャンプ 情報処理推進機構などが開く、若手向けの合宿型講習会。

SeHack365 情報通信研究機構が主催する、一年間かけて開発を続ける若手向けプログラム。二〇一七年開始。聞き手も二〇二六年度の受講生。

Code for Japan 市民が技術で地域の課題に取り組む活動を支える一般社団法人。各地にCode for 〇〇がある。

Redmine オープンソースのタスク管理ソフトウェア。

WebUSB ウェブページからUSB機器を直接操作するための、ブラウザの機能。

ext2` ext3` ext4 Linuxで使われてきたファイルシステムの形式。番号が新しいほど後発。

Trivy コンテナやファイルの中身を調べ、既知の脆弱性を持つソフトウェアを見つけるオープンソースの検査ツール。

Ein ウェブ画面を作るためのプログラミング言語。

「**ライトニングトーク**。五分程度の短い発表。

都電」語り手が二〇二五年一月に開いた催し。都電荒川線を二両貸し切り、三駅ぶんの走行時間を持ち時間として発表する。車内では機材が使えないため、印刷した資料と地声で行われた。

GPL GNU General Public License。変更して配布する場合、変更後のソースコードも同じ条件で公開しなければならない。

プロプライエタリ ソースコードが公開されず、提供者が権利を握っている状態。オープンソースの対義語として使われる。

OpenStreetMap 誰でも編集できる世界地図。地図そのものがオープンデータとして公開されている。

GTS バスや鉄道の時刻表を、機械が読める形で公開するための共通形式。

5374.jp コミの収集日を表示するウェブアプリ。二〇一三年にCode for Kanazawaが公開し、各地に移植された。

奥付

本書は、情報通信研究機構（NICT）が主催する SecHack365 の、二〇二六年度融合駆動コースにおける活動として編んだものである。

本書に収める各篇は、クリエイティブ・コモンズ表示・改変禁止四・〇国際（CC BY-ND 4.0）のもとで公開する。出典を示せば誰でも自由に使えるが、書き換えたものを配ることはできない。

これに加えて、各篇の語り手および編者は、原文の趣旨を損なわない範囲で本文を翻訳し、その翻訳版を公開・配布することを許諾する。その際は、翻訳であることと翻訳者名を示すこと。

第一篇

2026年7月15日 オンライン 57分39秒

第二篇

2026年7月17日 オンライン 46分20秒

第三篇

2026年7月23日 オンライン 51分47秒（冒頭欠）

第四篇

2026年7月18日 オンライン 56分24秒

第五篇

2026年8月1日 対面 40分47秒

第六篇

2026年8月24日 オンライン 63分

第七篇

2026年8月26日 オンライン 43分32秒

第八篇

2026年8月27日 オンライン 61分33秒

第九篇

2026年9月2日 オンライン 50分16秒

第十篇

2026年9月5日 オンライン 76分07秒

第十一篇

2026年9月9日 オンライン 49分03秒

第十二篇

2026年9月9日 オンライン 45分26秒

第十三篇

2026年9月10日 オンライン 54分37秒

第十四篇

2026年9月20日 オンライン 55分03秒

第十五篇

2026年9月23日 オンライン 72分22秒

第十六篇

2026年9月27日 オンライン 53分21秒

第十七篇

2026年9月30日 オンライン 88分47秒

聞き手・編

大川貴久

書名

OSSの生活史 第一集

編・発行

大川貴久

連絡先

okawa.takahisa.25@shizuoka.ac.jp

発行日

2026年9月10日